

武蔵府中熊野神社古墳(府中市)

ここを進んで熊野神社へ向かう



歩道にはこんな工夫もある





ここが熊野神社



これが熊野神社古墳







石室入り口







この熊野神社の本殿は府中市文化財に指定されている



正面は拝殿(江戸時代後期)



奥が本殿/江戸時代中期



府中市指定文化財

有形文化財（建造物） 熊野神社本殿・拝殿

指定 平成二〇年五月三〇日

熊野神社本殿の建築年代は、虹梁絵様や彫刻等の構成が簡素であることなどから一八世紀前半と考えられます。本格的に施工された屋根の柿葺も造営当時の状態を良くとどめており、江戸時代中期の府中周辺地域における社殿の形態が良好な状態で保存されています。また、拝殿の建築年代は、室内の長押上の壁に掛けられた木板、虹梁上の中備下の墨書及び虹梁絵様から一九世紀前半と推定されます。特に向拝部分は、一九世紀の華やかな装飾を今にとどめています。

本殿及び拝殿ともに、江戸時代中期から幕末における神社建築の造形をよく現している、市内でも数少ない貴重な建築物です。

平成二一年八月

府中市教育委員会

拝殿側面





右が本殿の覆屋





仮設の武蔵府中熊野神社古墳展示室(左手はその工事中)



くに し せ き
国史跡

む さ し ふ ち ゆ う く ま の じ ん じ ゃ こ ふ ん
武蔵府中熊野神社古墳



ふるさと府中の歴史・文化遺産を訪ねて—No.2



武蔵府中熊野神社古墳とは

武蔵府中熊野神社古墳は、飛鳥時代の7世紀の中頃(今から約1,350年前)に築造された古墳です。四角い墳丘の上に丸い墳丘が重なった形で、上円下方墳と呼ばれています。この形は古墳時代の終わり頃に造られるようになった、全国的にも非常に希少な形の古墳です。武蔵府中熊野神社古墳は、日本列島内の発掘調査により確認され、石が葺かれている上円下方墳の中では、最大規模であり、もっとも古いものです。

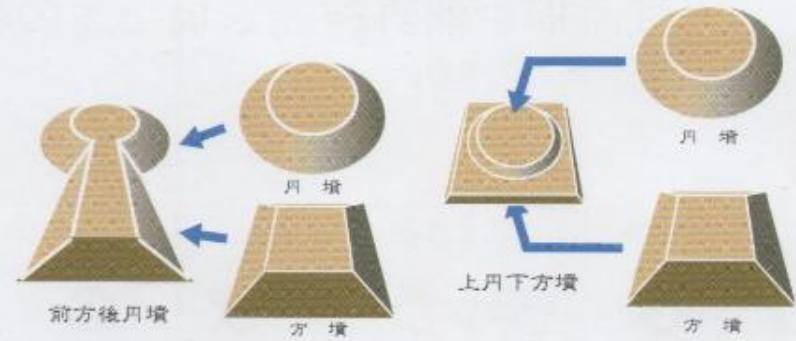
武蔵府中熊野神社古墳は、平成17年7月に国史跡に指定されました。そしてここに築造当時の姿に近い形で復元した古墳が完成しました。これもひとえに、熊野神社や熊野神社氏子会の皆様をはじめ、地域の方々のご理解・ご協力によるところです。厚く御礼申し上げます。

武蔵府中熊野神社古墳の

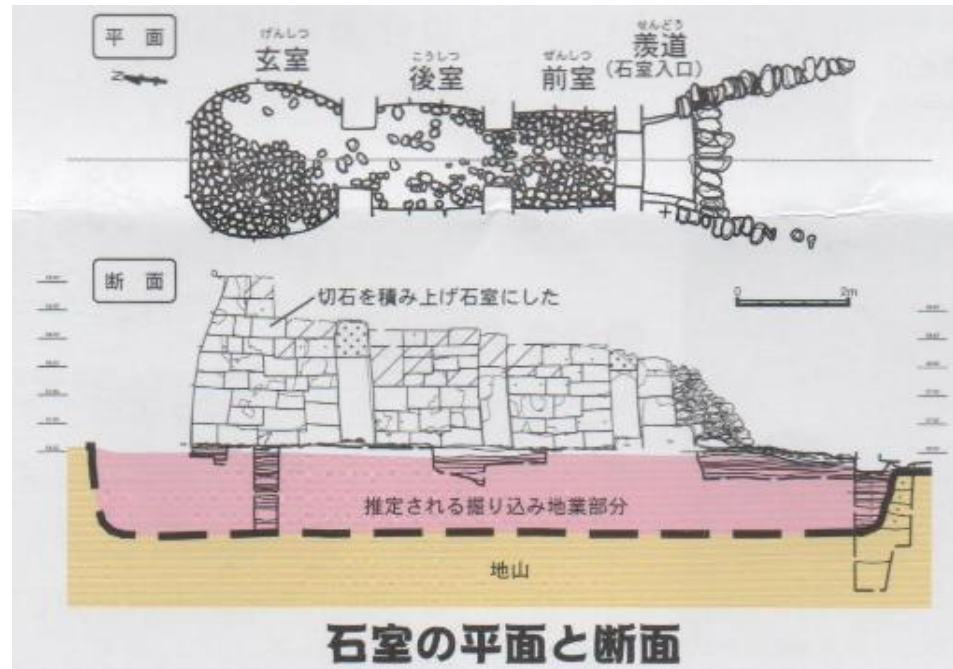


4つのポイント!

1. 上円下方墳
2. 念入りな設計
3. 土木技術
4. 先端文化



前方後円墳と上円下方墳のイメージ



石室の平面と断面



① 墳丘の調査



② 上円部西側



③ 下方部葺石北東角





④ 玄室



⑦ 石室正面



⑤ 前庭部縁石西側



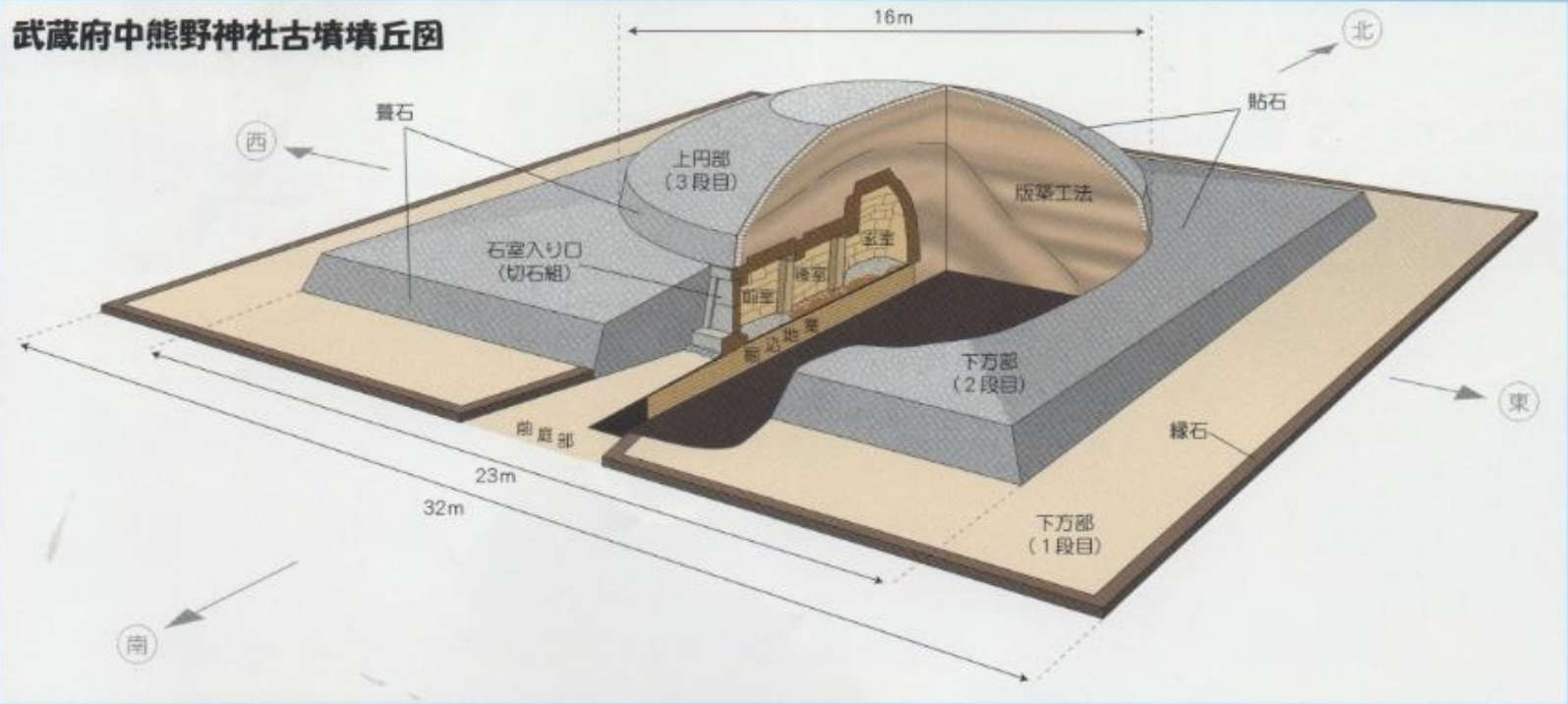
⑥ 石室下の掘り込み地盤

古墳のかたちと大きさ

古墳は、三段構造で各段とも盛り土で築かれています。上から見た形は、1段目と2段目が正方形で3段目が円形です。2段目と3段目は全面が河原石で覆われています。側面を「葺石」、上面を「貼石」と呼びます。1段目の外周には直方体に面取りされた切石による「縁石」が並べられています。南面の切石は、石室前に並び前庭部の縁石に接続し2段目の側面に接合しています。2段目の側面は小口積みという積み方で、上面は扁平な河原石と丸い小石が平らに敷かれています。2段目の南面を切り込む形で石室の入口がもうけられています。入口は切石で組み立てられています。3段目は葺石が円環状に積み、その上は、扁平な河原石で覆われたドーム風となり、最上部は石が平坦に敷かれたと推定されます。

古墳は、中央の支配権力を目に見える形で表したもので、大きさや形に政治的意図が反映されると考えられ、設計法が研究されています。武蔵府中熊野神社古墳の墳丘にも規則的な設計が見いだされます。古墳全体の中心軸は真北よりも西へ7度傾いており、磁北に近い方向を示しています。墳丘の1段目の一辺の長さ32mは、上円部の直径16mの2倍です。2段目の正方形の一辺の長さ23mは、上円部がすっぽり収まる正方形の対角線とほぼ同じ長さに造られています。これらは、1尺が約35cmの大尺と呼ばれる単位で設計されたものと考えられます。調査時に残存していた古墳の高さが約5mありました。そこで、復元の高さは、大尺での18尺に近い約6mとしています。

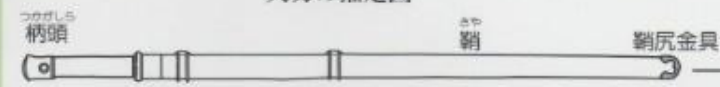
武蔵府中熊野神社古墳墳丘図



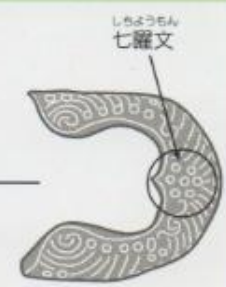
II 調査前の古墳北東側

武蔵府中熊野神社古墳出土の鞘尻金具

大刀の推定図



*七羅文は、陰陽五行思想の木、火、土、金、水と日(陽)、月(陰)の七羅(星)を表した古代中国の考えをもとに考案された文様といわれています。



*大きさは 長さ4.1cm、幅3.6cm





⑧古墳全景調査中

石室の構造

石室は、横穴式石室で、三室構造でした。一番奥の玄室は、壁面が丸みを帯びた部屋で、奥壁は特に大きな石が使われていました。中央付近には、古墳築造の基準杭の跡と考えられる小穴もありました。壁面は切石で組まれ、床面は平たい河原石が敷かれていました。

墳丘の断面をみると、異なる土の層を重ねる版築工法が採用されています。ロームを盛って一端突き詰め、その上に黒土混じりの土を盛って突き堅めるということを繰り返し築いています。石室に使われた石の削り屑が混じった層もある事から、石室造りと墳丘造りの作業が並行して進められたと考えられます。また石室の下もロームを主体とした土により掘り込み地業をしており石室を支える頑丈な基礎となっています。



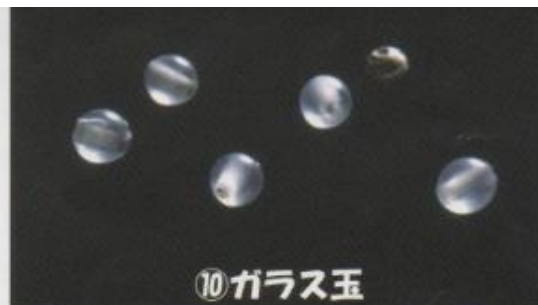
⑨靱尻金具

出土遺物

石室内に、埋葬時の副葬品は、ほとんど残っていませんでした。しかし、ガラス玉・靱尻金具・環金具・釘が残されていました。

この中で特に注目されるのは、大刀の一部である、靱尻金具に刻まれた「七曜文」という文様です。これは和同開珎（708年初鋳）よりも古いともいわれる富本銭にもみられる文様で、7世紀後半のものと考えられます。象嵌にみられる「七曜文」や繊細で精密な技法は中国・朝鮮から伝ったものと考えられます。

そのほか、遺体を納めた棺の飾り金具と思われるものも出土しており、被葬者は木製の棺に納められたと思われます。釘類が玄室と後室の2箇所から出土していたことから、埋葬が二度以上行われた可能性も考えられます。



⑩ガラス玉

築造時期

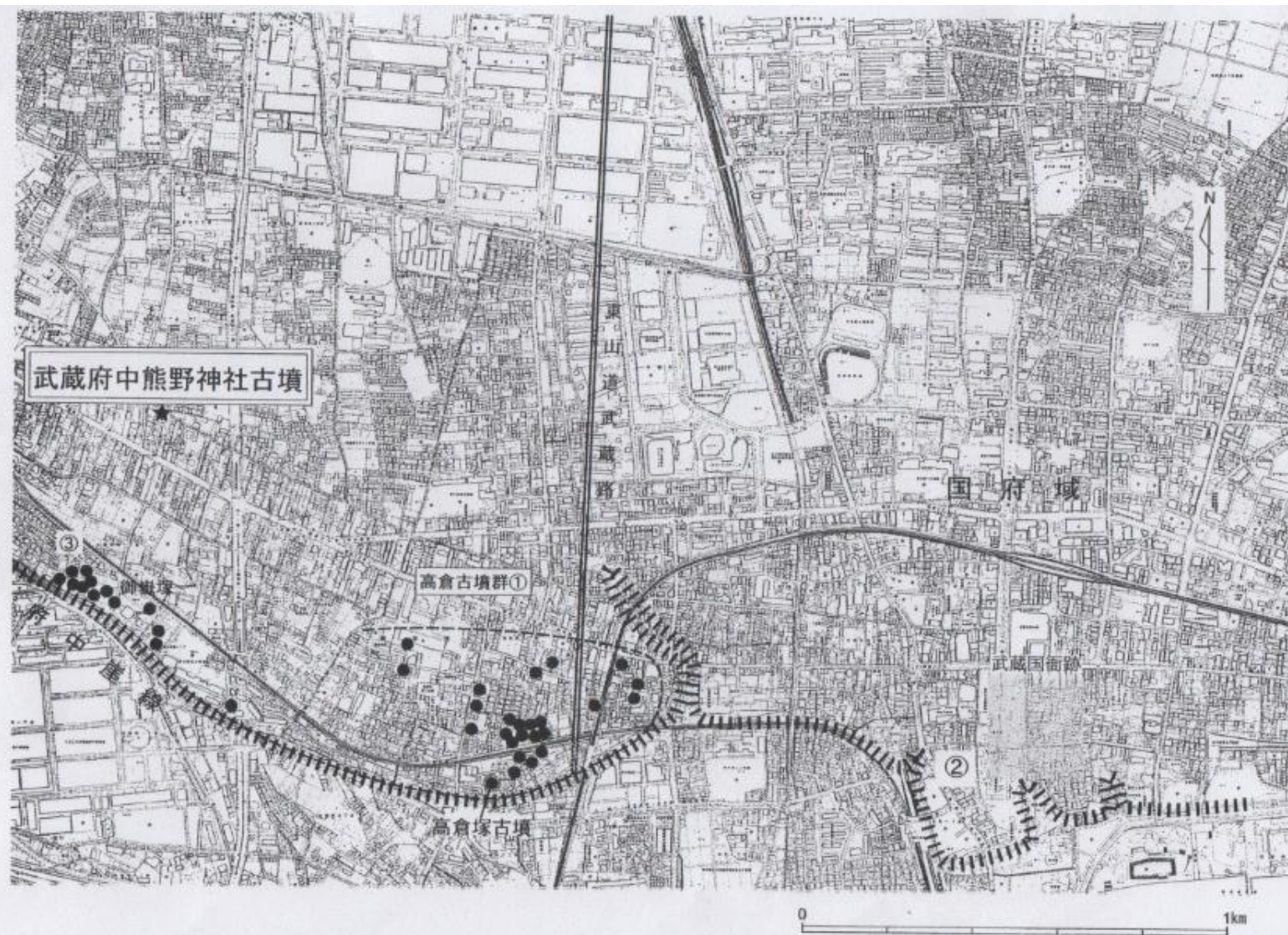
石室の形態や靱尻金具の特徴とその出土状況などを総合して考えると、この古墳は7世紀中頃には造られていたと考えられます。

この頃は、畿内政権によって、統一された日本の国が形づくられようとしていた時代であり、武蔵国に国府が置かれる直前と考えられます。

それまで各地域で造られていた古墳とは異なる形態の上円下方墳は、時代の変化を示すとともに、府中に国府が設置された背景をうかがわせる歴史的に重要な築造物といえます。

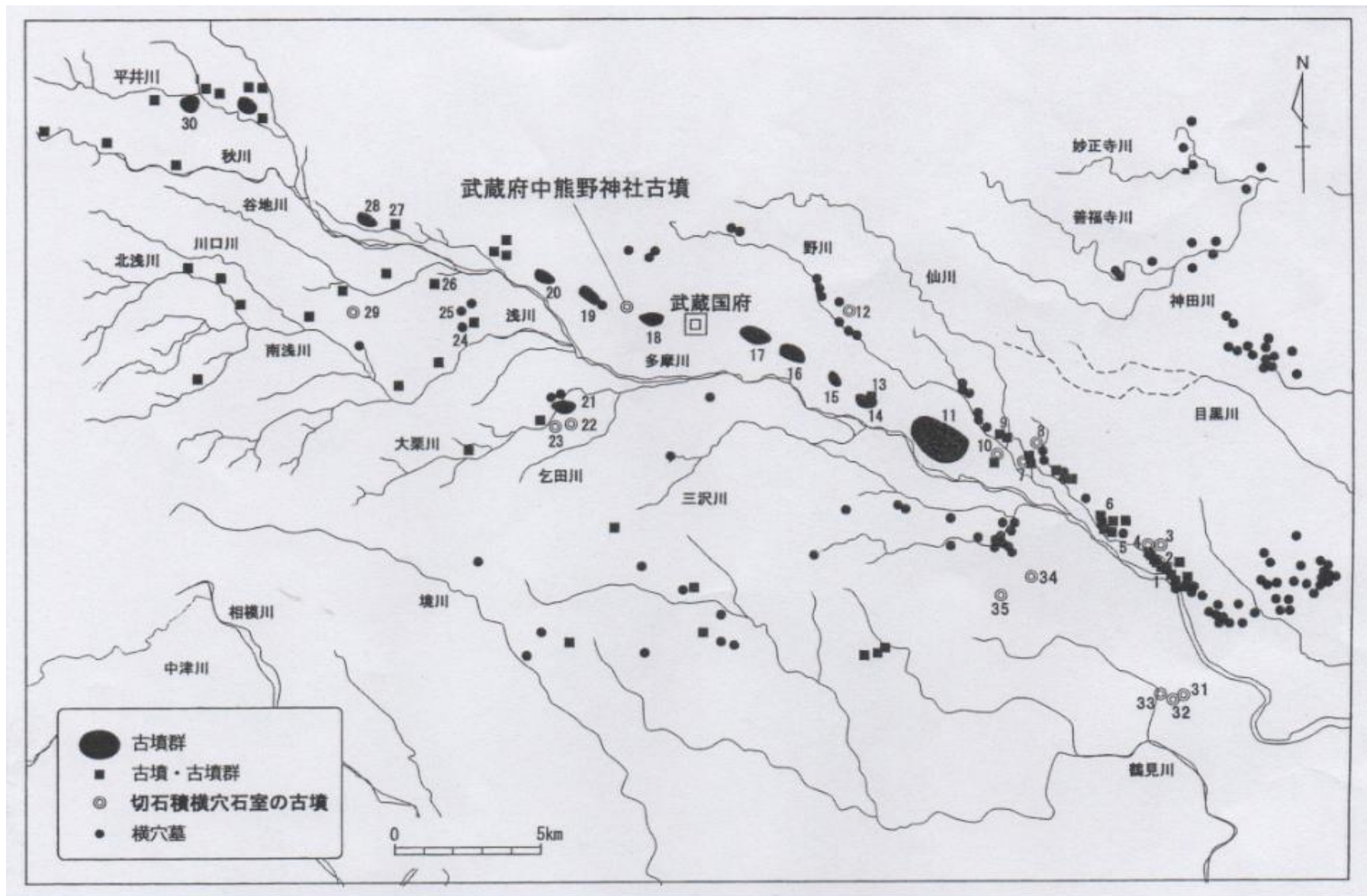
熊野神社古墳に類似した石室には、八王子市の北大谷古墳や三鷹市の天文台構内古墳があります。これらの古墳も7世紀代の古墳と考えられていますが、本古墳には掘り込み地業等の少し新しい特徴があります。

参考



府中市内の主要な古墳時代の遺跡 (1/1500)

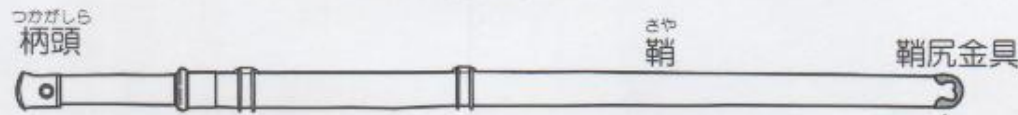
多摩川流域の主要な後・終末期古墳および横穴墓の分布図（1/25万）



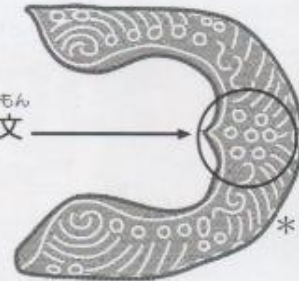
- | | | | | |
|------------------|------------------|---------------|----------------|-----------------|
| 1. 大田区多摩川台古墳群 | 8. 世田谷区大蔵1号墳 | 15. 調布市下石原古墳群 | 22. 多摩市稲荷塚古墳 | 29. 八王子市北大谷古墳 |
| 2. 大田区多摩川台5号墳 | 9. 世田谷区砧古墳群 | 16. 調布市飛田給古墳群 | 23. 多摩市臼井塚古墳 | 30. あきる野市瀬戸岡古墳群 |
| 3. 大田区観音塚古墳 | 10. 世田谷区喜多見稲荷塚古墳 | 17. 府中市白糸台古墳群 | 24. 日野市梵天山横穴墓群 | 31. 川崎市加瀬第9号墳 |
| 4. 大田区浅間塚古墳 | 11. 狛江市狛江古墳群 | 18. 府中市高倉古墳群 | 25. 日野市坂西横穴墓群 | 32. 川崎市加瀬第3号墳 |
| 5. 世田谷区等々力溪谷横穴墓群 | 12. 三鷹市天文台構内古墳 | 19. 国立市下谷保古墳群 | 26. 日野市七ツ塚古墳 | 33. 川崎市第六天古墳 |
| 6. 世田谷区野毛古墳群 | 13. 調布市狐塚古墳 | 20. 国立市青柳古墳群 | 27. 昭島市経塚下古墳 | 34. 川崎市法界塚1号墳 |
| 7. 世田谷区殿山1号墳 | 14. 調布市下布田古墳群 | 21. 多摩市塚原古墳群 | 28. 昭島市浄土古墳群 | 35. 川崎市馬絹古墳 |

武蔵府中熊野神社古墳出土のさやじりかな鞘尻金具

大刀の推定図



しちようもん 七曜文



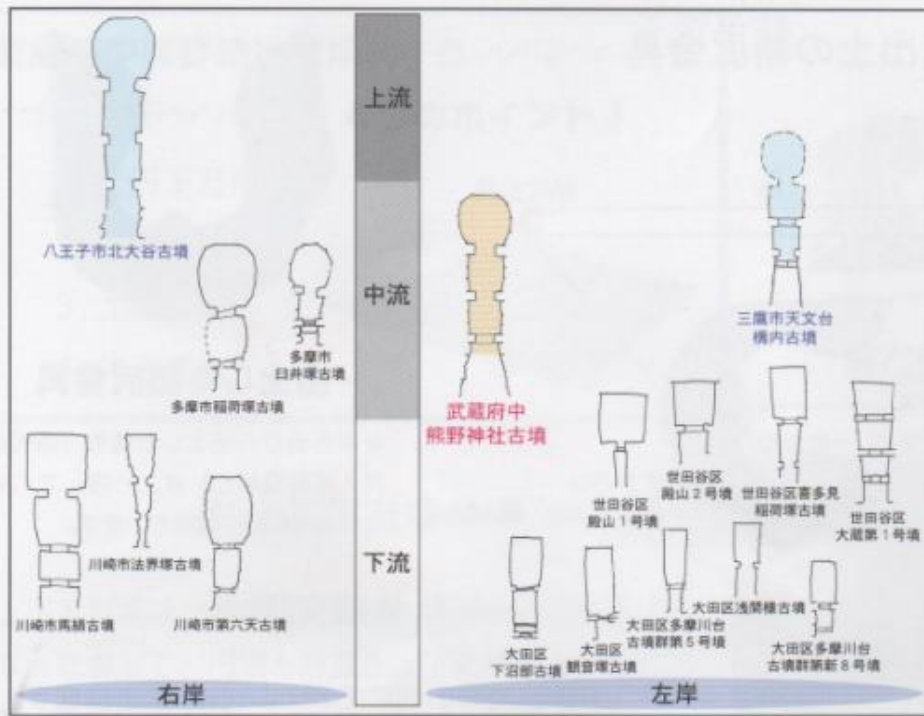
*大きさは
長さ4.1cm、幅3.6cm

*七曜文は、陰陽五行思想の木、火、土、金、水と日(陽)、月(陰)の七曜(星)を表した古代中国の考えをもとに考案された文様といわれています。



出土した鞘尻金具

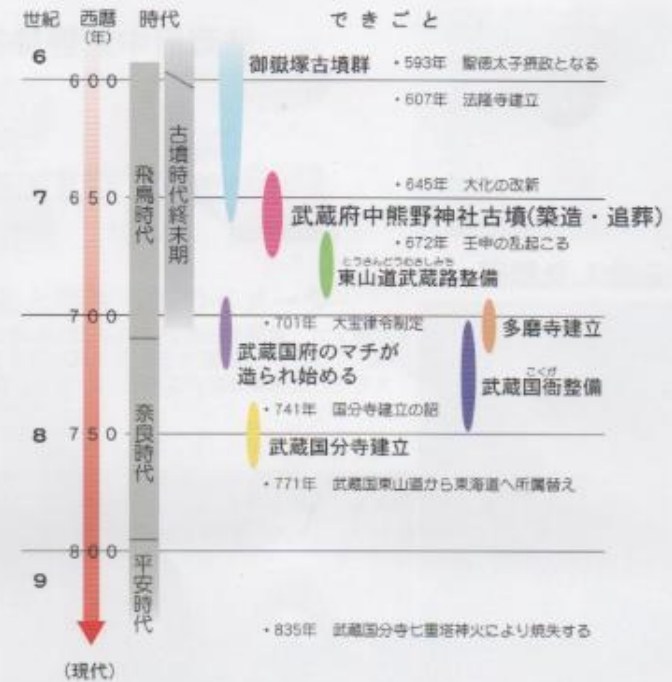
※本古墳から出土した遺物(鞘尻金具・環金具など)は、一括して市指定有形文化財になっています。



多摩川流域の主な切石を使用した横穴式石室

多摩川流域の切石を使用した横穴式石室は、下流域では方形（四角形）が多く見られますが、**胴張**（丸味のある）形の石室もいくつか見られます。これに対して中流から上流域では、胴張形の石室でもかなり丸みを帯びた石室になります。また、石室に使われる切石の産地も下流域と中・上流域では異なっていたようです。

色の付いている石室は、規模に差はありますが胴張りの玄室を持ち、3部屋で構成される同タイプの石室です。



7～8世紀の府中のできごと

※ここに示した年代はあくもその目安です

武蔵府中熊野神社古墳は7世紀の中頃から後半にかけて築造されたと考えられますが、それ以降に、古代の幹線道路「東山道武蔵路」、多磨郡の名前の付いた「多磨寺」、武蔵国府のマチの整備、国府の中心施設となる「国衙」の整備と、武蔵国にとって重要な施設が次々と造られていきました。

その後、再訪すると立派な武蔵府中熊野神社古墳展示室が出来ていた



その内部





これはその西側に建つ石室復元展示室



こんな感じ

